氏名（本籍）	長谷川（ハセガワ）　彩（アヤ）　子（コ）（東京都）
学位の種類	博　士　（美　術）
学位記番号	博　美　第 223 号
学位授与年月日	平成20年３月25日
学位論文等題目	〈作品〉「ある女の、品位を保つための、恥辱を忘れた、日常的遊戯」 〈論文〉工芸の皮膚－女性の形象と表層を漂う工芸
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（美術学部）　増　村　紀一郎
（論文第１副査）	國學院大學　〃　谷　川　渥
（作品第１副査）	東京芸術大学　〃　（美術学部）　櫃　田　伸　也
（副査）	〃　〃　（　〃　）　木　島　隆　康
（　〃　）	跡見学園女子大学　〃　北　澤　憲　昭
（　〃　）	金沢美術工芸大学　准教授　田　中　信　行

（論文内容の要旨）

Ⅰ　女性図像引用手法の考察

例えば女が爪を赤く染めること、羽根飾りのついた帽子を装着すること、それがその社会的地位とあいまって何らかの社会性差に関わることは明瞭である。しかしその行為について女性本人によるその意義の自発的な検証はなされているであろうか。日本社会に属する女の性を思い見るとき、そこに私一個人としての諦念、むなしく寒々しい感覚が存在することは、どうにも避けられぬ事実である。表面を繕う、かかる女の韜晦と克己のすべは、冷たい社会の風に晒された乾いた皮膚のごときものとなる。

私は、既存の絵画に表された女性図像を現代の女性の姿に描き変えるという引用手法をとって制作を行っている。この性の横溢の時代にあって、とりわけ女の性の問題は依然、個と社会との間に大きな隔たりを有し、それは作家の身の上においても同様である。真夜中に次々と湧き上がる「女のイメージ」を「社会に生きる意味」に還元せんと、それを形として刻みつける時、いつかどこかで見た絵画作品の女性図像の引用が、その困難を埋め合わせてくれる。今回の７作品ではボッティチェルリ、アングル、月岡芳年などが描いた古典絵画をとり上げ、引用を試みた。それらは一見こっけいなパロディーに見える。しかし引用された女性図像はオリジナルという重苦しい響きの意味を脱して、現在のわれわれにより真実味を感じさせる新しき姿となる。

ここに見出されるのは、これまで見込まれてきた概念から新たに、今を生きるわれわれの概念への転置である。詩人、文学者でありシュルレアリスムの発端を担ったアンドレ・ブルトンは次のように書いている。

> すべての事物は、一般にあたえられているのとはちがう用途を見こまれている。まさに最初の用途を意識的に犠牲にすること(中略)から、すでに定められた、あるいは定められうる別の世界のなかに、それとむすびついたいくつかの超越的な特性が生まれてくる。(マックス・エルンスト『百頭女』より「緒言」巖谷國士訳)

シュルレアリスムの代表的な手法デペイズマンをまさに言い当てた言葉である。今、このデペイズマンをとりわけ女性図像の引用に重ね合わせ論ずる時、私の作品には転置の新たな作用が付加される。

引用された女性図像はそれまで寄り添ってきた物語、背景、地平を失い、さらに新たな意味を課される。そして現代の建造物や町並みなどの風景と融合することで、観賞者にある違和感を提示し、性とわれわれの不整合な関係を照らし出すだろう。ここに記すのは、女性図像、人体の部位や衣服の形象など私の作品を構成する諸要素をあえて解体し、客体化してから改めてその意味を検証する作業である。そこには私自身の身体感覚、恥辱、精神の破綻、時には体系を逸脱するであろう諸観念が関わりを持ってくる。それらは作家個人の煩瑣なイメージの羅列に過ぎぬものかもしれない。しかしそれらが図像の引用手法による作用と共に語られてこそ、大方のフェミニズム論とは別の、個と社会の狭間にわれわれが共感し得る作品が成り立つのである。

Ⅱ　表層を漂う工芸

工芸の皮膚とは何か。

皮膚とはそもそも動物の肉体を覆う薄い外皮を指す。肉体に形を与え損傷を補い、感覚器官という役割をも担う。人間の実生活におけるその特質は機能としての様相が色濃い印象を与える。さて工芸とは、その素材、伝統的技法による美の特質が古くより我々を魅了し続ける、美術の一分野である。さらに生活に欠くことのできない用途、機能を備え持ち、我々の営みに常に寄り添ってきた。

しかし「工芸の皮膚」と言ったとき、それは前近代、近代、現代と区分された歴史、とりわけ西洋美術史の影響下に置かれた美術史の内に、矛盾を孕んだ、興味深い響きを帯びる。このとき皮膚とは、「表層」という言葉に置き換えられるだろう。生活の諸断片を覆う、美しい薄っぺらな皮膚――表層。工芸品が持つ用途の特質はとりはらわれ、その表面要素のみがあらわな姿を見せる。

「表層を担う」この言葉にぴたりと一致する工芸の一分野がある。漆芸はその材料の持つ特質により、「表層」との関係を本質的に内包する際立った存在である。漆、支持体を選ばず乾いて固着するその液体の性質は、あらゆる素材を凌駕して自在にその姿を変化させる。いわば他素材への憑依である。この素材こそが「工芸の表層」を担い、最も可能性を発揮し得るものと思えてならない。表面的であるという幾分負のイメージを孕む概念を、実際に物理的世界に着地させる媒体、それが漆である。

漆という素材を「工芸の皮膚」と銘打ちその技法を作品に用いるとき、そこには「表面の肯定、さらに言い進めれば深さの否定」という概念が見えてくる。伝統という歴史的価値を背負い、その言葉の内に趣や荘厳さ、深さを求められることが常であり続けてきた工芸に対し、これはまことにアイロニカルな視点であろう。用途の性質を除かれ、漆の材質感と装飾性のみを表面的に備えた作品は、皮膚感覚を喚起すべく投げ出されたもの、オブジェとなる。しかし私の作品は、用の美と視覚の美とがせめぎあい、その価値が混沌に陥りがちな現代の工芸という曖昧極まりないカテゴリーに身を置く故に、その可能性を大きく開かれる。工芸という仮装を纏い、その表層的形式を借用することにより、新たなリアリズムが生み出されるのである。

工芸とはその実用目的という性質から、我々の日常生活の合間、隙間に馴染んだ、触覚性を伴う存在であり続けてきた。しかし今、その触覚性と皮膚感覚、装飾性と表層が持つ意味をあえて区分して論じてみたい。そしてそれらが現代社会に生きるわれわれに受容し得るものなのかを問いかけたとき、美術における「工芸」という制度的枠組みはもはや効力を失い、われわれの生活や身体に根ざした、根源的な意志としての表象がその姿を現すのである。

章立てと題目

序論　女と社会の皮膚をめぐる表層的引用手法

一章　古典絵画図像の引用 ── エロスと醜怪なるもの
　一節　エロスの相を表象する女性図像
　　── ボッティチェルリ『受胎告知』からの引用
　二節　理想的イメージの解体
　　── アングル『ユピテルとテティス』からの引用

二章　身体感覚と社会の皮膚
　一節　身体感覚を喚起する体の部位の形象
　二節　汚穢を秘めたスカートとハイヒール
　三節　衣服の形象 ── 文化構造に読み取る女性の性

三章　工芸技法転用の意義についての考察
　一節　実用の美を抜け出るオブジェ ── 表層としての漆
　二節　仮想空間と実空間 ── 江戸玩具に見る視覚作用
　三節　額縁 ── 表象世界を包む器

結び　表層を漂う工芸